

## 高すぎる値段：18世紀競売の舞台裏をめぐる一考察

青野純子（明治学院大学）

九州大学芸術学研究会（2021年3月5日）

「芸術愛好家はかつて、傑出した絵画コレクションをつくりあげるのに千から一万ギルダーを惜しみなく投じたが、いまや（その程度の予算では）一流の画家の作品を買うことさえもできなくなった。 […] 人気のある作家の作品は、その値段が三倍から四倍に跳ね上がったのである。」（『友人への手紙』に対する返事』1752/53年）

17世紀オランダ絵画の値段の高騰をこう嘆いたのは、18世紀オランダの画家・伝記作家、ヨハン・ファン・ホールであった。ファン・ホールはこの著書において、値段の高騰の原因を、同時代の画家を顧みずに専ら17世紀絵画を売買する画商に帰し、さらにこの状況こそが18世紀の同僚画家たちを苦境に陥らせたとして、画商の責任を厳しく問いただした。無論、画家ファン・ホールによる画商批判を額面通りに受け取ることはできないものの、18世紀の絵画市場をめぐる近年の研究は、実にファン・ホールの証言を大筋で裏付けてきた。17世紀末から18世紀半ばの競売における落札価格を統計学的に分析した研究によれば、オランダ風俗画に破格の値段が付けられていたことが明らかになり、そしてコレクション形成の研究においては、国内外のコレクターが画商を通じて熱心に絵画を購入する様が浮き彫りになってきたのである。

実際に18世紀の競売目録とその結果を部分的にでも調査すると、ヘリット・ダウなど17世紀オランダ画家の作品の落札価格が、十数年の間に驚くほど高くなった事実が明らかになる。また画家ファン・ホールのみならず、画商たちの書簡においてもこれらの価格を「高すぎる」として嘆く言葉が残されている。競売においては、二人以上の入札者が競り合うことで絵画の値段が上がっていくため、高い落札価格は一般的に画家の人気の反映であるとされるが、本発表で試みたいのは、この高い落札価格に至るまでの経緯、すなわち競売の舞台裏に迫ることである。コレクターの絵画蒐集熱が、それを煽りながら誘導する媒介者としての画商の思惑とどのように結びつき、高い落札価格を生み出したのか、幾つかの事例を挙げながら考察したい。